

なにわ

シリーズ
267
部

人物誌



絵師・伊藤若冲 (一)

地域史研究者
三善貞司

絵は生命の描写と徹底した観察で

「鶏画」の第一人者となった伊藤若冲

猿を描かせれば森狙仙（本紙1988年11月号掲載）が日本一ですが、鶏なら伊藤若冲（しやくちゆう）に優る者はいない・・・といわれた江戸時代の絵師です。

若冲は享保1年（1716）京都の錦小路（現・中京区中之町）にあった青物商（野菜類を商った店）の「若狭屋」に生まれました。本名は仲兵衛。絵師になってからつけた雅号「若冲」は、「若狭屋仲兵衛」を短くして、仲の字を冲に変えてつけたものです。

なぜかわかりませんが、幼い頃から絵が上手。親から店番を手伝えといわれても、生返なま事ばかりして、店先に並んでいる大根やじゃがいも、白菜やねぎのスケッチばかりしています。友達があそぼとやってきても、あとでとといっただけで手を休めません。

「うまいなあ。本物よりいい。きょうはぼんの絵だけもろて帰る」

材料を買いに来たくせに、小銭を投げ出して仲坊なかつかの絵だけぶらさげて戻っていく料亭の板前さんもいるほどでした。

青年時代になると、西陣織の着物や帯の下絵や、清水焼の図案も頼まれるようになり、商いはそつちのけで狩野派の絵師について本格的に琳派りんぱ（尾形光琳・乾山らが始めた画風。華麗、かつ大胆な意匠で装飾化され知られる）の彩色技術を学びます。さらに、中国の宋そうや明みんの名画を徹底的に模写して、独特の画法を身につけていきました。

当時の京の画壇は、四条円山派まるやま（円山応挙を祖とする写生画。精細な観察で、生物・植物・山水を写実し、近代日本画の出発点になる）が主流でした。やがて若冲は大きな壁にぶつかります。

「どんなに写実に徹しても、応挙先生にははるかに及ばない。どうすれば先生とは別の、自分の絵が描けるのであろうか」

これが彼の永遠のテーマです。

悩んだ若冲は、応挙先生以上に花鳥・草木・昆虫・魚介などを、あきれるほど時間をかけて眺め続けるうち、はっと気づきます。「鳥や動物だけではない。草木も生きている。生きているからには生命がある。生命を描かねば絵ではない」

しかし、いつすれば生命が描けるのでしょう。悩んだ若冲は試行錯誤をくり返したのち、「そつだ、動きだ」と叫びます。生きものは動きます。その動きの瞬間を描けば、絵に生命の躍動感を写せるのです。動けば周りの空気も動く。空気が動けば色彩が微妙に変化す

る。これが若冲の芸術哲学の基軸になります。

四条派の色彩は、たしかに実物に忠実です。花鳥も風月も、自然そのままに見事に描きます。若冲はそのなかに動きによる微妙な変化を、単なる構図だけではなく、色彩で表現しようとしたのです。それが花鳥の生命の輝きでした。

若冲はやつと悟ったテーマの具体化に、鶏を選んでいきます。庭に数十羽の鶏を放し飼いにし、自分も鶏になって地べたにへたりこみ、ひねもすその動きを観察します。

「鶏には多様な色彩がある。動けば動きと光の具合で、さらに彩りが豊かに変化する。生命の躍動が凝縮したような色彩に、私は美の極致を見出している」

「あんだ、なんで鶏ばかり描いているの」と尋ねられた若冲は、こんなふうに答えています。

「若冲は琳派と四条派を融合させた画家である」¹⁾ という美術評論家もいます。たしかに森狙仙の猿画は淡彩ですが、若冲の鶏画は雄渾絢爛^{ゆうこんけんらん}（力強くきらびやかなこと）で、そういえないこともありません。しかしよく見てください。琳派にも四条派にもない色彩の動きに、融合ではない独自の境地が感じられます。生命の輝きを色彩化した画家、それが若冲です。

しかし私が若冲は本当に偉いなあと思うのは、その晩年です。寺院や神社の注文も多くなり、有名な大作「金閣寺大書院障壁画」をやりとげた寛政1年（1789）、若冲の自宅は類焼のため炎上し、所有していた作品はほとんど灰となりました。ときに73歳、当時では稀な高齢です。さすがの彼も絵画への情熱も意欲も失い病床につきまします。「舌がもつれ手足が震える」とありますから、卒中（脳血管の障害）でしょうか。

そんな若冲を励ましたのが大坂の鰻谷（現・中央区島之内）の豪商吉野五運です。彼は名薬三臍円（内臓に効能があつた薬剤）の販売で大成功、大坂では三本の指に入る富裕な商人でしたが、熱烈な若冲ファンでした。五運は傷心の若冲を自宅にひきとり、名医たちを集めて診療させ、三臍円は無論、あらゆる高貴薬を飲ませ、全力で介護しました。

「お前さんに死なれたら困る。わしは光琳や応挙は持つてるが、お前さんに頼んだ鶏の絵、まだもろてへんぞ。な、約束したやないか。1枚でええ。死ぬんやったら描いてからにして」と何度も訴えます。

